

「第44回シナリオS1グランプリ」

部門番号②

「polluted water (汚水)」

笈川 敏昭

【登場人物】

加藤聖依子（6）（30） 容疑者

米田正樹（18）（30） 弁護士

渡辺直子（24） 米田の秘書

弓川大介（28） 新人弁護士

加藤雄大（63）（75） 聖依子の義父

加藤美津子（35） 聖依子の母

綾瀬幸太郎（初老の男）（58）（70）

聖依子の父

白井健（73） 聖依子の夫

河村幾多郎（70） 聖依子の伯父

米田智恵美（28） 米田の妻

米田瑞穂（5） 米田の子供

米田慶子（40）（52） 米田の義母

家政婦①（40） 加藤家の家政婦

家政婦②（45） 加藤家の家政婦

家政婦③（50） 白井家の家政婦

【あらすじ】

米田は地方の名家の生まれで義母に支配されながらも東大法学部に入り弁護士事務所を開き家族三人で順風満帆な生活を行っていた。記憶からは消していたが18歳のある日鬱屈した気持ちを抑える事が出来ず路地裏を徘徊しているところ加藤聖依子（18）が初老の男と絡み合っている所を目撃してその場を離れられなくなってしまう。そして聖依子と目が合うとその瞳に魅せられ、今自分が住んでいる世界ではなく聖依子が住んでいる世界に行きたいと思ってしまう。そんな自分の考えに恐怖を抱くが、無意識にその記憶を封印して日常生活に戻っていった。そしてその12年後に聖依子と再会をして、その時の記憶がよみがえり、周りの心配を無視して破滅の道を進んで行く。

一方加藤聖依子は、3歳の時に母美

津子と資産家の義父の加藤雄大（63）の家に入ると加藤から寵愛を受ける。美津子は自分が病気で死ぬ事を知っていた為、母に知り合いの資産家を紹介してもらい、聖依子の為に加藤の元に嫁いたのだった。その3年後に美津子が病で亡くなると、聖依子は母の代わりに加藤の世話をするようになる。18歳になる頃、年老いた加藤（75）の面倒を見て行く事に嫌気がさし始めていたある日、加藤が聖依子の部屋で急死してしまう。高齢で持病もあった為、誰もその死因を疑う者はいなかった。呆気なく膨大な遺産を手に入れた聖依子だが全てを加藤に支配されて為、自由を謳歌するすべを知らなかった。そんなある日、自分の感情を抑えきれず路地裏を彷徨い心の隙間を埋める為に初老の男と激しく求めあっていると、路地の角から聖依子を見ている米田

(18)と目が合ってしまった。直感的に、もしかしたらこの男が溝川でおぼれている自分を救ってくれるのではないかと妄想を抱き、米田に会う為に初老の男を半殺しにしてしまう。自分の暴力性に慄き怖くなり、此処にはいられないと悟り町から出て行ってしまふ。

それから12年後、聖依子は保険金目的で資産家の夫を殺した容疑者として世間を騒がしていた。そんな中、聖依子は代理人を通じて米田を探しあて弁護の依頼をする。二人は面会を重ねるが、米田がああ時の聖依子を思い出さない為、過去を執拗に語り続けると、ある出来事をきっかけにして米田のあの記憶が蘇える、そこから米田は聖依子の汚水まみれの世界に引き込まれて行き、遂に二人は、二人だけの樂園(死に場所)を目指して北の果てに旅立つて行く。

○加藤家・屋敷の入口前（夕）

T・Y県S市・昭和26年7月

加藤美津子（35）、加藤聖依子（6）

したたる汗を拭きながら、屋敷を見上げて  
いている。

門が開いて池のある庭が一面に広がる。

西日が差し込み、蝉が鳴き続けている。

美津子、聖依子の手を繋ぎ歩いて行く。

○同・庭・池の前（夕）

加藤雄大（63）鯉に餌をあげている。

聖依子、加藤と鯉を見ている。

加藤、振り向いて聖依子に餌を渡す。

加藤「ほら、これを上げなさい」

聖依子、池に餌を投げつける。

鯉が跳ねて水しぶきが上がる。

聖依子、驚いて美津子に抱きつく。

加藤、笑みを浮かべ美津子を見る。

聖依子、足元を見ると石の上で蛙が交  
尾をしている。

聖依子、蛙をじっと見る。

加藤「こうするとオタマジヤクシが沢山生まれるんだよ」

加藤、笑っている。

聖依子「かか、気持ち悪いよ」

加藤、聖依子を見ている。

○同・応接間（夕）

応接間で美津子、聖依子、テーブルを挟んで、加藤の3人が座っている。

加藤、美津子と聖依子を見ている。

美津子「これからお世話になります」

美津子、聖依子一緒にお辞儀をする。

加藤「堅苦しい挨拶は良いから、長旅で疲れただろう、まずは風呂に入って汗を流してください」

○同・大浴場内（夜）

湯舟に美津子、聖依子浸かっている。

聖依子「お母さんあのおじさん誰なの？なん

か気持ち悪いね」

美津子「あのおじさんが聖依子のお父さんに  
なるんだよ」

聖依子「えっ、どうして？」

美津子「お婆ちゃんが聖依子のためを思つて  
新しいお父さんを探してくれたの、これか  
らは何不自由なく過ごせるのよ」

聖依子「何かここ嫌だよ、ねえ、かか、家に  
帰りたいよ」

美津子、聖依子の両肩を掴んで、

美津子「そんな事言わないの、聖依子はここ  
で生きて行くしかないの、分かった？」

美津子、聖依子を見つめて、桶を手に  
して湯船のお湯をすくう。

聖依子の頭を撫でながら、優しく頭か  
らお湯をかけていく。

美津子「大丈夫、お父さんは優しいから」

美津子、聖依子の髪を撫でながら、何  
度も頭からお湯をかける。



○同・リビング（夜）

部屋の隅に家政婦①（40）が立っている。

テーブルを挟んで食事が並んでいる。

加藤と美津子食事をしている。

美津子の隣で聖依子加藤を睨んでいる。

加藤「どうした？お腹減っていないのか？」

美津子「すいませんこの子人見知りで、直ぐ

になれると思いますので気にしないでくだ

さい」

加藤「そうだな、いきなりお父さんが出来た

んだ、驚くよな？」

加藤、笑みを浮かべ聖依子を見ている。

加藤「美津子、確か病院は来週だよな？」

美津子「申し訳ございません、暫く帰れない

と思いますので聖依子をお願いいたします」

聖依子、美津子を見上げて、

聖依子「えっ、お母さん病気なの？」

美津子「お母さんは大丈夫だから、お父さん

の言う事をちゃんと聞くのよ」

加藤「お母さんは直ぐに帰って来るから、良  
い子にして一緒に待っていていようね」

美津子、俯いてゆっくり食べ始める。

聖依子、食事に手をつけず美津子を見  
ている。

窓の外、半月に厚い雲が掛かっていく。

○同・台所（夜）

家政婦①、②（４５）が洗い物をして  
いる。

家政婦①「あの女、絶対に財産目当てよね」

家政婦②「それがね、そうじゃないのよ、何  
でも奥さんもう長くないみたいで、子供を

加藤家の養女にするためみたいなの」

家政婦①「何、それ、どういう事？」

家政婦②「ご主人様が、奥さんのお母さんと  
昔何かあったみたいで、その絡みから面倒  
をみる事になったって話よ」

家政婦①「あんたなんでも知っているのね、  
でもそれってなんか気持ち悪くない？」

家政婦②「でしょ？でも資産家で、63歳の初婚のお爺ちゃんの考える事なんか私達下々の物には分からないわよ」

美津子台所の扉外の脇に立っている。

家政婦①、②、二人で笑っている。

○同・聖依子の寝室（夜）

聖依子ベッドに横たわり、窓に打ちつける雨の滴を見ている。

聖依子、立ち上がり部屋から出て行く。

○同・廊下（夜）

聖依子暗く長い廊下を歩いている。

聖依子歩いて行くと扉から明かりが漏れて、美津子の喘ぎ声が聞こえてくる。

聖依子一瞬立ち止まるが、ゆっくり進んで、扉の前で立ち止まっている。

廊下の壁の窓に雨の滴が流れている。

聖依子扉を少し開け、中を覗いている。

○同・外堀（夜）

堀に強い雨が降りつけ、側溝から泥水が溢れている。  
どぼどぼと音を立て泥水が溢れている。

○溝川（夜中）

強い雨、汚水が流れる小さな川。  
汚水が下流に流れていく。  
夜空から強い雨が降りつけている。

T・「polluted water」汚水」

○加藤家・大浴場内（夕）

T・昭和38年5月

湯気で覆われている湯船。  
湯船の中、影が揺れてぶくぶくと泡が出ている。

水しぶきが上がり、聖依子（18）が湯船から出て来る。

聖依子手で顔を拭って大きく息を吸う。

聖依子「あーっ」

○同・庭・全景（夕）

五月雨がしとしと池に降っている。  
石の上、蛙が「ゲゴゲゴ」鳴いている。

○同・応接間（夕）

扉を開けて聖依子部屋に入る。  
仏壇に美津子の写真が置いてある。  
聖依子、お線香をたいて手を合わせる。

○同・加藤の寝室（夕）

扉をノックする音。  
加藤（75）ベッドの中から扉を見る。  
扉が開くと聖依子が入って来て加藤の  
ベッドに近づいて行く。

聖依子「トト、具合はどう？」

加藤、嬉しそうに聖依子を見上げる。

加藤「心配させてすまん、大丈夫だよ」

窓の外、庭が見える。

石の上の蛙が部屋を見ている。

加藤、庭の蛙を見ながら、

加藤「聖依子、蛙の子はどうあがいても、蛙の子なのだよ」

聖依子、悲しそうに蛙を見ている。

蛙、池の中に飛び込む。

× × ×

聖依子、ベッド脇に座っている。

加藤、聖依子の手を撫でている。

聖依子「御免ね、トト、明日試験だからもう行くね」

加藤、聖依子が扉を開け出て行く様子を見ている。

聖依子振り返り、

聖依子「トト、今日は大人しく寝ていてね！」

加藤、笑みを浮かべる。

○同・廊下（夜）

窓に雨が降りつけている。

加藤がゆっくりり階段を上って来る。

廊下を歩いて聖依子の部屋の前に立つ。

○同・聖依子の部屋内（夜）

部屋の扉がゆっくり開く。  
ベッドに寝ている聖依子、扉に背を向  
けて目を開けている。  
加藤、聖依子のベッドに入って行く。  
聖依子、目を閉じて身を固くしている。

○同・廊下（夜）

聖依子の部屋から衝撃音がする。

○同・聖依子の部屋内（夜）

聖依子、下着姿で扉の前で震えている。  
加藤、ベッドの上で息絶えている。  
聖依子、震えながら加藤を見ている。  
部屋の窓に雨が降りつけている。

○同・外・庭（夜）

池の脇の石の上で蛙が何匹も集まり交  
尾をしている。  
空から雨が降り続けている。

○加藤家外・玄関前・全景（夜）

加藤家の提灯がぶら下がっている。

居間の奥から、お経が聞こえてくる。

ぼつり、ぼつりと、喪服を着た人々が、

加藤家から出てくる。

家政婦①「聖依子ちゃん一人になっちゃって」

家政婦②「お母さん亡くしてから仲のいい親

子だったからね」

家政婦①「血は繋がっていないけどね」

家政婦②「ちよつと、こんな時よしなさいよ」

弔問客とすれ違い、庭で家政婦①、②、

神妙に頭を下げ、立ち去る。

○同・居間（深夜）

午前2時、誰も居ない居間の祭壇に、

沢山の献花が添えてある。

中央には、加藤の遺影が置いてあり、

蝋燭が灯り、お線香がたかれている。

聖依子（18）、制服姿で一人、正座

をして座っている。



聖依子ゆっくり立ち上がり、白無垢で横たわる加藤をまたいで、見下ろす。

聖依子「天国なんかに行かせないからね」

聖依子、加藤の顔の近くまで行き、

聖依子の涙が、加藤の顔に落ちていく。

聖依子、頬の涙を手で拭い天井を見る。

### ○場末の路地裏（夜）

ネオンが点滅する人影が少ない路地裏。

髪を金髪に染め、濃い化粧をした聖依

子、焦点の定まらない目で、ふらふら

と、歩いている。

初老の男の後姿（５８）、聖依子に近

づいていく。

男「こんな時間に何をしているんだ？」

聖依子「おじさん、教えてよ、此処は一体ど

こななの？」

男「面白いお嬢ちゃんだね、こんな時間に彷徨

っているんだ、欲しい物があるんだろ、

言っでごらん、私が何でも買ってあげるよ」

聖依子「私お金は持っているの、私が欲しい物はお金で買えない物なの、だからきつと何処にも無いの」

男「ふーん、私はお嬢ちゃんが欲しいな」

聖依子、笑みを浮かべ男を見つめる。

聖依子「いいよ、私で良いならあげるよ」

聖依子、男にすり寄って行く。

男、聖依子を壁に押し付け抱きつく。

聖依子、視線を感じ路地の角を見る。

角の脇で、誰かが聖依子を見ている。

男、聖依子の胸に顔を埋めている。

聖依子、抱かれながら路地の角を見る

と瞳に『若い男』の姿が映っている。

○米田家・リビング室内（朝）

T・昭和50年7月

テレビ画面、白井聖依子（30）が、レポーターの質問に答えている。

画面の中、聖依子が不服そうに質問に答えている。

米田正樹（30）、米田瑞穂（5）と食卓で、朝食を食べている。

台所から米田智恵美（28）が卵焼きを持って食卓に置く。

画面ではレポーターが興奮して、レポーター「保険金目的の殺人で疑いが持たれている白井聖依子ですが、現在、容疑については全面否定をしております」

聖依子の顔が映っている。

テロップには、「毒婦聖依子、保険金目的の殺人容疑で逮捕Xデーが近い？」

智恵美「パパ、この女の人の目怖いね」

米田茶碗を持ったまま、テレビ画面に目を移す。

米田「でも、まだ逮捕されていないのにこの扱いは酷いよな」

智恵美「でた、人情弁護士様！」

米田、智恵美を見る。

智恵美「そもそも75歳の資産家のお爺ちゃんと結婚する事がありえないわ」

米田「でも本当に愛し合っているとかもある  
でしよう？」

智恵美「で、パパだったらどう弁護するの？」

米田、画面の聖依子を見ている。

米田「そうだな、どうするかな」

画面、聖依子が、レポーターを睨みつけている映像。

○オフィス街

オフィス街、人々行き来している。

米田汗を拭きながら、小走りで移動している。

米田、古びたビルに入っていく。

○米田法律事務所内

米田慌ただしく事務所内に入ってくる。

米田「ただいま」

事務所の渡辺直子（24）、弓川大介（28）が、米田を見る。

直子、米田を見て応接室を指さす。

米田、慌てて応接室に入って行く。

○同・応接室

直子部屋に入って来て、テーブル上に麦茶を置いていく。

米田、汗吹きながら麦茶を一気に飲む。

米田の前には、黒いサングラスを掛けた河村幾多郎（70）が、米田に名刺を渡す。

直子お辞儀をして、部屋から出て行く。

米田、河村商会・相談役・河村幾多郎と書かれた名刺を見ている。

河村「唐突で申し訳ないのですが、白井聖依子の弁護をお願いできないでしょうか？」

米田「え、白井聖依子って、あの？」

河村「そうです、今世間を騒がして、あの毒婦と言われている聖依子です」

米田「河村さんは白井聖依子さんと、どのよ  
うな関係なのですか？」

河村「恥ずかしい話ですが、私の姪にあたり

まして」

米田「そうですか」

河村「全くお恥ずかしい、身内の恥ですよ」

米田「それなら、なぜ河村さんが依頼を？」

河村「私も、もう古い先短い身ですので、一応、血のつながりのある姪の希望を聞いてあげたくてお邪魔した次第であります」

米田「え？　意味がわかりませんが」

河村「え？　聖依子から、地元の知り合いの弁護士さんだと、聞いておりますが」

米田「私と聖依子さんが知り合い？」

河村「ええ、学生時代の知り合いだから、きつと私の事を助けてくれると言っております。した、それで今回弁護の依頼に伺った次第なのですが」

米田「聖依子さんは、Y県S市の出身ですか？」

河村「そうですよ、でも本当に聖依子と面識がないんですか？」

米田「ええ、申し訳ございませんが」

河村「でも、聖依子の強い希望ですので、弁

護を引き受けてもらえませんか？報酬は、  
しつかり払いますのでお願い致します」

米田「しかしまだ起訴されていないですよね」

河村「遺族から民事で結婚詐欺の容疑で訴訟  
がされています、あわせて今後起訴された  
際の対策含めて弁護をお願いしたいのです」

米田、困惑の表情でお茶を飲む。

河村「聖依子は義父から多額な遺産を引き継  
でおります、金銭目当てで記事のような事  
をするとは思えません」

米田「お気持ちは分かりましたが、少し考え  
させてください」

#### ○同・事務所内（夕）

テーブルの上には、聖依子の週刊誌の  
記事が見開きで置いてある。

「『聖依子の写真』、見出し『高齢の  
夫を保険金目当てに殺人の疑い』、『疑  
惑否定の独占インタビュー』、『毒婦  
聖依子は元ヌードモデルだった』、等」

事務所のテレビでは、レポーターが聖依子の事をコメントしている。

米田、直子、弓川、テレビを見ながら、

直子「先生、本当に弁護引き受けるんですか」

弓川「マスコミの注目すごいですよ、いきなり有名弁護士の仲間入りですね」

直子「何、言っているのよ、マスコミの餌食になる可能性が大でしょうが、先生、この弁護絶対に断った方が良いですよ！」

米田「そうだけど、何か引つかかるんだよな、

一旦、白井聖依子に会ってから決めるよ」

弓川「聖依子に会いたい気持ち分かりますよ」

直子「先生は、ミーハーな貴方とは違うの！」

米田、テレビの画面を見ている。

○白井家・マンション外・入口前

小雨が降っている。

数名のマスコミがマンション前にいる。

傘をさす米田の姿を見つけて、

レポーター「聖依子さんの知り合いですか？」



米田「すいません、通してください」

米田、その中をぬけてマンションに入  
って行く。

○同・マンション内・リビング

聖依子、ソファの上で週刊誌を不機嫌  
そうに見ている。

インターフォンが鳴る。

聖依子、扉穴を見ると傘を持っている

米田が立っている。

米田「米田ですが、白井さんのお宅ですか？」

聖依子「米田さんですね、マスコミはいない？」

米田「はい、ここは大丈夫です」

聖依子「今開けるから待って」

○同・玄関前

聖依子、笑みを浮かべ扉を開ける。

米田、玄関前で濡れたスーツを拭いて  
靴を脱いで上がろうとする。

聖依子、その様子を見ている。

○同・リビング

テーブルを挟んで米田と聖依子座っている。

聖依子「御免なさいね、あの連中本当に邪魔でしょう」

米田「そちらこそ大変ですよね」

棚の上にある水槽の中の蛙が聖依子を見ている。

米田、テーブルに書類を出している。

聖依子、米田の動きを見ている。

聖依子「あ、今日はわざわざお出で頂きありがとうございます」

米田「はじめまして、米田です」

聖依子「はじめまして？」

米田、聖依子見つめ合う。

米田「すいません、河村さんから伺ったのですが、どうしても思いだせなくて、何処でお会いしたか教えて頂けますか？」

聖依子、米田から目を反らして、

聖依子「思い出せないならいいのよ、先生は

かならず思い出ししてくれるはずだから」

米田、戸惑うが、

米田「すいません、では今回の依頼についてお聞きしてよろしいですか？」

聖依子「先生、私は夫を亡くした被害者なのよ、どうしてもマスコミからこんな酷い仕打ちを受けないといけないの？」

米田「確かに今のマスコミはやりすぎですよね」

聖依子「先生は私がお金の為に白井を殺したと思っっているの？」

米田「それが分からないから今質問をしようとしているのですが」

聖依子、米田を見る。

聖依子「ふっ、先生って私の想っていた通りの人だわ、先生ならきっと私の事分かってくれるって今確信したわ」

米田「えっ、そんなことを言われましても」

聖依子「先生、時間は大丈夫ですか？」

米田「ええ、大丈夫ですが」

聖依子、米田をじっと見つめる。

聖依子「今から私の話を聞いて貰えるかしら」

米田、聖依子の視線に頷く。

聖依子、窓外の雨を見ながら話始める。

○フラッシュ・駅のホーム（明朝）

T・昭和38年6月

聖依子の声「今日も雨ね、私の転機って、いつも雨から始まるの」

駅のホームに雨が降りつけている。

聖依子（18）、鞆を持って始発電車を待っている。

○同・首都圏・繁華街の交差点（夕）

聖依子、人々が行き来する中を、キョロキョロしながら歩いている。

○同・繁華街（夕）

聖依子に若い男が名刺をだして声をかける。

聖依子、笑みを浮かべて近づいて行く。  
若い男、一瞬たじろぐ。

聖依子、話を聞きながら一緒に歩いて行く。

○同・撮影スタジオ

真ん中のベッドに聖依子が下着姿で座っている。

カメラマンが様々な角度から写真を撮っている。

聖依子、笑みを浮かべながら、様々な挑発的なポーズをとっている。

カメラマン笑顔で受け答えをしている。

○同・クラブのラウンジ（夜）

聖依子（28）、刺激的なドレスで中高年の男達と飲んでいる。

店に白井健（73）が杖を突いて入って来る。

聖依子、白井を見ると席の男達に会釈

をして立ち上がる。

×

×

×

聖依子、白井と楽しそうに飲んでいる。

○同・白井のマンション・外（夜）

高級マンションの入り口にタクシーが  
乗りつける。

白井と聖依子が車から降りる。

○同・リビング内（夜）

テーブルを挟んで白井と聖依子食事を  
している。

脇に家政婦③（50）が一人立ってい  
る。

白井が何か話しかけて聖依子が笑みを  
浮かべている。

○同・寝室（夜）

聖依子が、ベッドの中で寝ている白井  
を包むように抱いている。

聖依子、白井を冷たい視線で見る。

○同・郊外の公園（夕）

枯葉が舞う銀杏並木の道。

聖依子が杖を突いている白井を支えて歩いている。

○同・白井のマンション・浴室内（夜）

浴槽内、聖依子と白井が向かい合ってお湯に浸かっている。

聖依子が白井の歯を磨いている。

白井の歯ぐきから血が出ている。

聖依子、笑みを浮かべ歯茎の血を舐めている。

○同・リビング内（夜）

聖依子、白井、テーブルに並んでお酒を飲んでいる。

聖依子、白井にお酒を注いでいる。

白井、かなり酔っている様子。

聖依子、さらにお酒を注いでいる。

聖依子立ち上がり、リビングから出て行く。

○同・浴室内（深夜）

浴室の明かりが点いている。

白井、仰向けに湯船に沈んでいる。

○白井のマンション・リビング（夕）

マンションの窓に西日が差している。

米田「二人でかなり遅くまで飲んでいて、朝

起きたら白井さんが浴槽で死んでいたと？」

聖依子「そうよ、私もかなり酔っていたから

白井を一人残して部屋で休んだの」

米田珈琲を一口飲み、聖依子を見る。

聖依子「朝起きたらリビングに居ないから、

慌てて部屋中探したら浴槽で溺れていたの

よ」

米田「しかし検死の報告からは、肺の中に水は入っていないかったとありますが」



聖依子「そんな事は知らないわよ、私は白井が風呂場で浮いているのを見ただけなんだから」

米田、聖依子を見ている。

米田「それを証明できる人はいますか？ 家政婦さんとか？」

聖依子「家政婦は私が白井を見つけた時に出勤してきたの、だから」

米田「ということは、証明できる人はいないって事ですよね」

聖依子、米田の手を握りながら、

聖依子「だから米田さんに証明をしてほしいのよ、どうなの、助けてくれるでしょう？」

米田、聖依子の手を離して、

米田「まずは、白井さんの家族から訴訟されている内容を確認してから考えましょう」

聖依子「あの遺産目当ての糞みたいな子供達ね、死ねば良いのよ、あんな奴ら」

米田「そのご遺族ですが、聖依子さんへの相続は無効だと主張されていますが」

聖依子「私は白井の遺産なんか別に欲しくないのよ、お金なんか十分持っているし、ただくれるっていうものはしつかり貰うわよ、なんせ労働に対しての対価なんだから」

米田「労働の対価？　白井さんの事を愛していたのではないのですか？」

聖依子、大声で笑いだす。

聖依子「米田さん、私年を取った男に興味があるって言ったのよ、白井を愛しているなんて言っていないわよ」

米田「お金も欲しくない、愛しても居ない、それではなぜ一緒に居るんですか？」

聖依子「理由、そうね、多分、金持ちの爺から全てを奪いつくしたいの」

米田「どうして、そんな事？」

聖依子「そんな事先生には関係ないでしょ」

米田「ではその事情は、白井さんにも関係ないのでは？」

聖依子「関係あるわよ、私には何でも持っている爺から全てを奪う権利があるのよ」

米田「権利？」

水槽の蛙が聖依子と米田を見ている。

聖依子「今はいいわ、米田さんはいつかきつとわかってくれる筈だから、今日はもう疲れたわ、この先は次回以降にしませんか？」

窓の外は暗くなっている。

米田、あわてて席を立ち、

米田「あつ、すいません、こんな時間ですね」

聖依子、米田を見つめながら、

聖依子「また来てくれますよね」

米田、聖依子と、水槽の蛙を見る。

米田「まずは白井さん家族からの訴訟資料を

今一度確認してみますね」

一緒に立ち上がりリビングを出る。

○同・玄関前（夜）

米田、玄関の扉から出て行く。

聖依子「先生、連絡待っていますね」

聖依子、玄関の扉が閉まる音をする。

○同・マンション外（夜）

雨はやんでいる。

周りにはマスコミはいない。

米田外に出て、マンションを見上げる。

○バー・「魔女の祝福」・店前（夜）

路地裏の地下に看板が出ている。

酔った様子の人々が歩いている。

米田、メモを見ながら店を見つける。

○同・店内（夜）

カウンター内で片目に眼帯をしたバー

テンの綾瀬幸太郎（70）が酒を作っ

ている。

扉が開き、米田が入って来る。

直子と弓川、扉の音に振り返る。

直子「先生、此処ですよ」

直子、弓川、カウンターに置かれたグ

ラスをいじっている。

綾瀬「いらっしやいませ」

米田、席に座りながら、

米田「とりあえずビールをください」

綾瀬、米田を見ながら、

綾瀬「畏まりました」

米田「分かりづらいところにあるな、この店よく来るの？」

綾瀬、米田にビールを出す。

直子「事務所に出前を持ってきた人が、初回割引で半額になるから行ってみてください。だって、言われたから試しに来てみました」

弓川「その子、イケメンだったんだよね」

直子「うるさい、その情報いらない！」

米田「ま、いいけどさあ」

お互いに目配せをして飲み始める。

弓川「先生、聖依子の印象はどうでした？」

米田「うん、そうだな、何というか、雑誌や

テレビの印象とは若干違うと言うか」

直子「もしかして聖依子の美貌にひかれた？」

米田「違うよ、何かその動機と言うのが、今一つ分からなくて、腑に落ちないんだよ」

直子、鞆から書類を出ながら、

直子「先生、私も気になって河村さんから親戚や知人を紹介してもらって、聖依子の過去を調べたんですよ」

米田、ビールを飲みながら直子を見る。

直子、書類をめくりながら、

○フラッシュ・加藤家・屋敷の入口前（夕）

直子の声「聖依子は、昭和26年7月の6歳の時に、加藤の家に養女として入ったんですけど」

加藤美津子、加藤聖依子したたる汗を拭きながら、屋敷を見上げている。

門が開いて池のある庭が一面に広がる。

西日が差し込み、蝉が鳴き続けている。

美津子、聖依子の手を繋ぎ歩いて行く。

○同・葬儀会場（夜）

祭壇に美津子の写真が飾ってある。

直子の声「体の弱かった美津子はその3年後

に死んでいるんです」

住職が、お経をあげている。

祭壇の前で喪服姿の男女がお焼香をしている。

祭壇脇に座っている加藤と聖依子が弔問客にお辞儀をしている。

直子の声「元々美津子の家は資産家だったんですけど、旦那がろくでもなくって全ての資産を食いつぶして蒸発したみたいなの」

聖依子、美津子の写真を見ている。

加藤、聖依子の手を撫でている。

直子の声「で、残された美津子と聖依子の将来を心配した祖母が生活に不安のない様に加藤を紹介したみたいなの」

○バー・「魔女の祝福」・店内（夜）

米田、ロックグラスを手にして直子を見ている。

弓川「それって、先の短い美津子の代わりを高齢の加藤に託したって事？」

直子「加藤って相当偏屈な親父で、美津子との結婚が初婚なの」

弓川「加藤っていくつだったの？」

直子「加藤が63歳で、美津子35歳」

弓川「えっ、すごいね」

米田「加藤は美津子の古い先が短い事を知った上で結婚をしたって事だよな？」

直子「そうなんですよ、これって何か気持ち悪いでしょう？」

弓川「初めから聖依子目当てって事ですか？」

綾瀬、作業の手を止めて皆を一瞬見る。

直子「あくまでも可能性だけだね」

米田「誰かその事が本当かどうかを知っている人はいるのか？」

直子「家政婦に聞いたんですけど、加藤は、それは、それは、聖依子を寵愛していたみたいで、でもそこまででした、でも限りなく想像通りかと」

弓川「それってどうなのですか、聖依子はその事を誰かに相談しなかったの？」



直子「そんな人いる訳ないでしょ、でも、は  
た目には聖依子も嫌がることなく仲良く親  
子をしていたみたいなの」

弓川「生きて行く為に、一人で抱えて受け入  
れていた、と言う事か」

直子「どんな思いで過ごしていたかは、私達  
には想像は出来ないけど、きっと」

米田「きっと？」

直子「私なら耐えられないと思います」

米田、3人のグラスが空になっている  
ため、綾瀬に会釈をする。

綾瀬が足をひきずりながら柵から酒を  
取り、グラスに注いでいく。

各々にお酒が出される。

弓川「先生、なんかこの案件、気持ち悪すぎ  
ませんか？」

米田、酒を飲んでいる。

直子も、酒を飲みながら、

直子「あつ、そうだ、あとその頃の話で」

○フラッシュ・加藤家・縁側（夕）

加藤（75）、聖依子（18）が縁側に座り庭の景色を見ている。

直子の声「家政婦さんが言っていたんだけど、聖依子はいつも学校から帰ると縁側で、小一時間、加藤と庭の蛙を見ていたんだって」

庭の蛙が交尾をしながら、聖依子と加藤を見て鳴いている。

聖依子饅頭を食べながら蛙を見ている。加藤、その聖依子の様子を見ている。

直子の声「まるで、何か二人の儀式みたいだったって、言っていました」

庭の蛙達、何匹も鳴いている。

池の中、オタマジャクシが沢山泳いでいる。

○バー「魔女の祝福」・店内（夜）

綾瀬、誤ってグラスを床に落とす。

「ガシャン」と衝撃音。

3人、綾瀬を見る。

綾瀬「申し訳ございません」

米田、壁の棚を見ると脇に水槽があり、  
中には蛙が二匹いる。

米田、驚いて綾瀬を見る。

綾瀬は目を反らす。

直子、気にせず書類をめくりながら、  
直子「ここからが本題なんですけど、加藤は  
75歳の時に心臓発作で亡くなっているん  
ですけど、聖依子の部屋のベッドの中で死  
んでいたんですって」

米田、弓川、直子を見る。

弓川「それって」

直子「死因に不信なところはなかったから自  
然死になっているんですけど」

弓川「まだ何かあるの？」

○フラッシュ・路地裏（夜）

聖依子、雨の中ずぶ濡れで歩いている。

直子の声「加藤が死んでから数日して、突然  
聖依子が髪を金髪に染めたんですって」

聖依子、服は血塗れで立っている。

直子の声「それから人が変わったように毎夜家を空けるようになったらしんです、それまで寄り道せずにまっすぐ家に帰って来ていたのに」

角材が地面に横たわっている。

その脇に血まみれの男がうつ伏せで倒れている。

○同・田舎道（夜）

聖依子雨の中必死の形相で走っている。

○同・加藤家・庭（夜）

聖依子、庭を駆抜けて家に入っていく。

直子の声「そして、ある日を境に聖依子は実家から居なくなっただけです」

庭のいたるところで蛙が鳴いている。

○バー「魔女の祝福」・店内（夜）

綾瀬、水をグラスに入れて飲んでいく。

直子、一気にお酒を飲み干す。

米田、直子を見ている。

弓川「米田さん、これ以上聖依子に関わらない方が、良いのでは」

米田「……」

直子「でも先生、何かひかれていますよね」

米田「僕にこの事件から手を引かせるためにここまで調べてくれたんだね」

直子「何か、同性の女の勘ですが、この案件には関わるなって言っているんですよね」

米田「多分、二人の勘は当たっていると思う、きつと」

直子、米田の事を見る。

直子「先生と聖依子の接点も調べたんですよ、でも隣の同級生ってだけで接点はなかったんです」

米田「俺も色々考えたけど思い出せない」

直子「聖依子は学校が終わると直ぐに家に帰っていたから、唯一考えられるのは」

米田「考えられる？」

直子「先生、路地裏、金髪の聖依子、雨、の  
キーワードで何か気づくところありません  
か？」

直子、米田を見ている。

米田、お酒を飲みながら棚の蛙を見る。  
蛙が米田を見ている。

○フラッシュ・路地裏（夜）

ビルの角で米田（18）が何かを見て  
いる。

聖依子、壁を背にして抱かれている。

男の背中と手が動いている。

聖依子、抱かれながら米田の視線に気  
が付く。

米田の瞳に聖依子の顔が映る。

米田の声「あっ」

聖依子、米田に微笑む。

○バー「魔女の祝福」・店内（夜）

米田、突然立ち上がる。

直子、弓川、驚いて米田を見る。

弓川「どうしたんですか？」

米田「いや、何でもない」

直子「何か分かったんですか？」

米田「いや、悪いけど用事を思い出したから失礼する」

米田立ち上がり店から出て行く。

弓川、直子、閉まる扉を見ている。

弓川「どう思う？」

直子「嫌な予感しかないわね」

弓川「でもこの短い時間でよく調べたね」

直子「加藤の家の話って色々と話しづらい内容でしよう？　でもそうゆう話ってみんな話したくってしようがないのよね」

弓川「他人の不幸は蜜の味って事？」

直子「そういうこと」

弓川「少し悪い顔しているよね」

直子「ほっといてよ」

綾瀬、俯いてお酒を作っている。

水槽の蛙が、弓川、直子を見ている。

○バー「魔女の祝福」・入口前（夜）

米田、満月の夜空を見上げる。

風が強く、雲が月を覆っていく。

米田、俯いて突然走り出す。

○フラッシュ・米田家・米田の部屋

黒メガネの米田正樹（18）、机には参考書が置いてあるが、エロ本をじつと見ている。

米田慶子（45）、扉をノックして、夜食を持って部屋に入ってくる。

米田、慌ててエロ本を隠して振り向く。

慶子「正樹さん頑張ってるね、勉強で学校の皆を見返しましょうね」

慶子、米田の隠した本をちらつと見る。

米田「は、い……」

慶子「正樹さん、ここで、頑張るかどうかで一生決まるんですからね、今は色々な事を我慢するんですよ、いいですね！」

慶子、米田の太ももを優しく撫でる。



米田顔を赤らめ頷いて勉強を続ける。

○同・路地（夜）

米田、夜の繁華街を彷徨っている。  
酔っ払った男達、夜の女達が大声を  
出して歩いている。

米田、路地裏に迷い込んでしまう。

○同・路地裏（夜）

壁を背にした金髪の聖依子（18）が  
男と抱き合っている。

米田、電柱の影から、男の背中越しに  
見える聖依子を見ている。

男、聖依子の胸に顔を埋めている。

聖依子、米田の視線に気付くと、米田  
の事を見て「助けて」、と、ゆっくり  
口元を動かす。

米田、その場を動けず立ち尽くす。

聖依子、米田を見ている。

電柱の灯りに蛾が集まっている。

聖依子激しく男と絡み続けている。

米田、聖依子を見ながら、震える手で股間に手を当てている。

酔っ払いが、大声を出してきた為、男が聖依子と離れ、場所を移動していく。

男小走りで、酔っ払いに文句を言っている横で、米田と聖依子すれ違う。

一瞬、聖依子、米田の耳元で「此処で待っていて」と、小さく囁く。

米田、振り返る聖依子を見ている。

聖依子、青い石のネックレスを首からちぎり地面に落としていく。

聖依子笑みを浮かべ歩いて行く。

米田、聖依子達が居なくなると地面に落ちたネックレスを拾い握りしめる。

電柱の灯に蛾が集まり止まっている。

強い風、月に厚い雲がかかって行く。

○白井のマンション・リビング内（夜）

聖依子、ソファでくつろいでいる。

窓の外から満月が見える。

インターフォンが鳴る。

聖依子、立ち上がりリビングを出る。

○同・玄関前（夜）

聖依子、玄関の扉穴を覗く。

米田が扉の前に立っている。

聖依子「あら、先生どうしたの？」

米田「こんな遅い時間にすみません」

聖依子「今開けるから待って」

米田が思い詰めた表情で入って来る。

○同・リビング内（夜）

聖依子と米田、テーブルを挟んで向かい合っている。

聖依子、米田をじっと見ている。

米田、いきなり早口で話し始める。

米田「こ、こんな夜にすみません、でも、どうしても分からないんですよ、貴女にはご主人を殺さなくてはならない動機はないで

すよね、で、」

聖依子「もうそんな事は、どうでも良いわ、週刊誌が書いているような屑みたいな情報を、ああだ、こうだと言っている人達に、何を思われてもかまわないわ」

米田「でも、このままではあなたは逮捕されてしまう可能性が高いんですよ、だから思い出した事や、些細な事でも良いので、何か有利になる情報を教えてください」

聖依子、笑みを浮かべて米田を見る。

聖依子「ふふっ、でも先生が今本当に知りた事は、そんなことじゃないでしょ？」

米田、驚いた表情。

聖依子「私にはわかるわよ、あの事でしょ？」

米田「えっ」

聖依子「先生、やっと思い出してくれたのね、私を見る目ですぐわかったわ、あの時と同じ目をしていた」

米田「……」

聖依子「先生が知りたい事は、私が殺したか

どうかじゃなくて、12年前に私が路地裏で先生を誘ったのに、どうして戻ってこなかったかを知りたいんでしよう」

米田「……」

窓の外の雲が覆っていて月が見えない。

聖依子、笑みを浮かべ、

聖依子「先生、あの日のあの時に、私にまわりついてくれた全てを、先生とあの日の雨が洗い流してくれたの」

米田「……」

窓に雨の滴が一粒ずつ当たり始める。

聖依子「私、あの後先生に会いたくて、どうしようもなくなつて、先生の所に行こうとした私を、あの男が臭い息を吐きながら止めて来たの、今考えてもイライラするわ」

米田、呆然と聖依子を見ている。

○フラッシュ・路地裏・行き止まり（夜）

強い風、夜空が雲で覆われている。

大粒の雨が降って来る。

雨の中、聖依子と男の後姿が見える。

聖依子、男に腕を捕まれるが振り払う。

俯いた男の口元が笑っている。

男、聖依子の背中に抱き付く。

聖依子、壁に背中ごとぶつかる。

男、衝撃で手を離しうつ伏せに倒れる。

聖依子、足元にあった角材を握る。

聖依子の声「あの男の薄ら笑いが本当にムカ  
ムカして、私、脇にあった角材で、思いつ  
きり頭を殴ったの、貴方に会う為に、無我  
夢中で何度も殴ったの」

聖依子、男を角材で何度も殴っている。

強い雨、地面に血が流れていく。

○同・路地裏・角（夜）

空から大粒の雨、米田が誰も居ない路  
地に立っている。

× × ×

米田、雨の中で一人立っている。

救急車のサイレン音が聞こえてくる。

米田、サイレンを聞いて驚いた表情。

米田、雨空を見上げて走り出す。

○白井のマンション・リビング（夜）

米田、呆然として聞いている。

聖依子「そうしたらその男、動かなくなったの、もしかしたら死んだのかと思ったら、急に怖くなって走って家に帰ったの」

米田、じっと聞いている。

聖依子「だから先生の所には行けなかったの、でも先生が私に語りかけたのよ、『その男を殺して、早く僕の所に来い』って、そうでしょ、ねえ、先生、聞いている？」

米田、脂汗を掻いて体が震えている。

米田「その男は、どうなったのですか」

聖依子「大丈夫、生きているわよ、ああいう男はしぶとくって生命力があるの、殺しても死なないタイプよ、だから安心して」

米田「それはあなたの願望では」

聖依子「そんな事はどうでも良いのよ、重要

な事はね、ずっと先生の息遣いと視線が私の脳裏に張り付いて離れないって事、爺達に抱かれる度にいつも先生に見られている気がしていたの、だから先生が私の事を覚えていなかったはショックだった、私と同じ様に、あの夜の事を忘れないでいてくれると思っていたから」

米田、胸を押さえながら、

米田「僕はある時の自分が怖くなって、ずつとここの奥に閉じ込めていたんだ」

聖依子、米田をじつと見ている。

米田「だから、さっきまで気がつかなかった」

聖依子「でも気が付いてくれた、やっと思いついてくれた」

聖依子、米田を見つめて手を握る。

米田「でも、僕はもう、あの時の僕じゃない、その事が言いたくって、だからあなたの弁護をお引き受けする事は出来ません、すいません、これが言いたくて」

聖依子「そんなこと言いに来たの？」



米田「……」

聖依子、立ち上がろうとする米田の手を握る。

聖依子「先生が、私の運命を変えたのよ、分かっているの！」

聖依子、米田を睨んでいる。

米田「……」

聖依子「先生目を覚ましてよ、自分はエリートだと勘違いしている様だけど、先生はただの変態なのよ、あのあと私を想像して何回いったの？ 言ってみなさいよ！」

米田「貴方の言っている事は無茶苦茶ですよ」

聖依子「先生はあの時、こっち側に来ていたはずなのよ、どうしてまだそっちにいるのよ」

米田「落ち着いてください、あっち側とかこっち側とか意味が分からないですよ！」

聖依子「あの頃の先生は、毎日毎日、女のあそこにしに興味がなかった層のはずよ」

聖依子、米田をじっと見ている。

聖依子「今だって私の体を見ている、辛うじてまっとうに生きているようだけど、私が欲しくて仕方がない」

米田、立ち上がり聖依子の手を振り払  
いリビングの扉を開ける。

聖依子、笑みをうかべて、米田の後姿  
を見ながら、

聖依子「先生、逃げても無駄だよ、先生は必  
ず私の所に帰って来るわ！」

米田、一度立ち止まるが出て行く。  
窓の外、強い雨が降りつけている。

○フラッシュ・路地裏（夜）

米田（18）、雨の中、路地裏を彷徨  
っている。

傘を持った娼婦が米田を誘っている。

米田、慄き小走りで逃げる。

店の扉が開き別の娼婦が誘っている。

米田、必死に走り抜けている。

○繁華街・路地裏（夜）

雨の中、店の前で客引きをしている男と女達が呼び込みをしている。

米田（30）、ずぶ濡れになって雑踏の中を彷徨っている。

客引きの中に、昔の金髪の聖依子に似た女が立っている。

米田、驚きその女を見つめている。

金髪の女、米田を目で誘っている。

更に雨が強くなり、米田、一瞬躊躇うが女の所に行く。

米田と女、雨の中、雑踏に消えていく。

強い雨で前方が見えなくなる。

○バー・「魔女の祝福」内（夜）

時計、午前3時、店内には客は居ない。

扉が開いてびしょ濡れの米田が入って来る。

米田、酔った様子でカウンターに座る。

綾瀬「かなり酔っているようですけど？」

米田「ウイスキーをロックで」

綾瀬「大丈夫ですか？ あれから、何件目で  
すか？」

米田「ほっといてください」

綾瀬「この辺のお店でぼられましたか？」

米田「なんで？ 分かります？」

米田、座った目で綾瀬を見る。

綾瀬「まあ、無事で戻られただけでも良かったですよ、普通身ぐるみはがされますから」

米田「この辺りって、そんな危ない街でした  
っけ？」

綾瀬「人によりますよ、どんなに抗っても、  
導かれる方向に進んで行くしかないですか  
らね、貴方みたいに」

米田「じゃ、またここに来られたって事は良  
かったって事ですね」

綾瀬「此処が良いかは分かりませんが、少な  
くとも今は良いと思われた方がよいかと、」

米田、酒を飲み干す。

米田「その発想って店の名前と関係あるの？」

綾瀬 「うーん、どうでしょう？」

米田、棚の蛙の水槽を見ている。

米田 「その蛙だけど、飲み屋なのに生き物置いてあるんですね？　しかも蛙を？」

綾瀬 「オーナーの趣味なので」

綾瀬、米田の前にお酒を置く。

米田、一口飲みながら、

米田 「そうなんだ、マスターはこの店長いの？」

綾瀬 「この店のオープンからですから1年ですかね」

米田 「こっちの人なの？」

綾瀬 「いやY県です、娘に呼ばれてこっちに来ました」

米田 「えっ、僕もだけど、どの辺りなの？」

綾瀬 「S市の奥の方ですよ」

米田、表情を歪めて、

米田 「そこ、僕の地元ですよ」

綾瀬 「ね、そういう事ですよ」

米田 「そういう事って、どういう事ですか？」

綾瀬 「すべては繋がっているって事ですよ」

米田、ハツとした表情をする。

米田「まさか、オーナーは、白井、聖依子？」

綾瀬「そう、私の実の娘です」

米田「えっ？」

綾瀬「偶然と言って信じます？」

米田「いや、意味が分からない」

綾瀬「あなたは既にこっち側に取り込まれて  
いるんですよ」

米田「……」

綾瀬「もう此処から抜け出すことはできない  
んですよ、多分、行くべき所に行かない限  
り、たとえそこがどこであっても」

米田「なにをいつているんですか」

綾瀬「もう、分かっているでしょ？」

綾瀬、足を惹きずりながら近づき、片  
目の眼帯を外すと白目が見える。

米田、その白目を見ている。

綾瀬「私の、この目とこの足、あとこの頭、  
娘の聖依子にぼこぼこにされた傷ですよ、  
その時は気づきませんでしたかね、危なく

死ぬところでしたよ」

米田「生きていたんですね」

綾瀬、米田の顔を覗き込む。

綾瀬「私とあなたが話しているっておかしくないですか？」

米田「どういう事ですか？」

綾瀬「私は覚えていませんが、私と聖依子が路地裏にいた時、あなたいたんですよね？」

米田「……」

綾瀬「聖依子とは知らず、実の娘を買おうとした男ですよ、最低ですよ、ある意味、聖依子に殺されても仕方がなかったのかも  
しれません」

米田「本当に偶然なんですか？」

綾瀬「わかりません」

米田「あなたは気が付かなかったんですか？  
実の娘さんですよ？」

綾瀬「3歳から会っていなかったら分かりませんよ」

米田「そんなあなたがどうしてここに？」

綾瀬 「わかりません、突然聖依子から連絡があり、良い給与出すからこっちに来ないと誘われてきただけですから」

米田 「どうして僕がこの店に来ることが分かったんですか？」

綾瀬 「そんな事って、簡単な事なんですよ」

米田 「で、僕に、どうしろと」

綾瀬 「あの子も可哀想な子でね、私のギャンブル好きのせいで家がめちゃくちゃになつてしまったので」

米田 「それで離婚をした」

綾瀬 「はい、私は地元に住られなくなり関西に逃げる様に、はい、風の便りで聖依子に身寄りが居なくなつたと聞きました、地元に戻ったんですが」

米田 「それで娘と知らず、買う訳ですか」

綾瀬 「そしてその現場をあなたが見ていた」

米田 「聖依子さんは、あなたを父親と知ったうえで半殺しにしたと？ もしくは」

綾瀬 「もしくは？」



米田 「知らずに、ただ半殺しにした」

綾瀬 「そのどちらかも、しれないし、どちらでもないかもしれない」

米田 「聖依子さんは何をしたいんですか？」

綾瀬 「聖依子は生まれてからずっと汚水の中で溺れているんです」

米田 「溺れている？」

綾瀬 「聖依子は、私と義父の加藤が泥水の中に溺れさせたんです、だから、そこから何とか抜け出したんだと思います」

米田、驚いた表情。

米田 「まさか、あなたも、聖依子さんに何かしていたんですか？」

綾瀬 「昔の事なので忘れましたが、もしかしたら、加藤と同じ事をしていたかもしれない  
せん」

米田 「まだ、幼い聖依子さんに？」

綾瀬 「今となっては覚えていませんがね」

米田 「本当に糞みたいな話ですね」

綾瀬 「この話をあなたに聞かせるために私は

此処に呼ばれたんだと思います」

米田「……」

綾瀬「聖依子の闇は、暗すぎて本人にも見え  
ないんだと思います」

米田、綾瀬を睨んでいる。

水槽の蛙が米田を見ている。

○フラッシュ・路地裏（夜）

金髪の聖依子と、綾瀬幸太郎が壁に背  
をつけ、抱き合っている。

米田、電柱の影からじっと覗いている。

綾瀬、聖依子の胸に顔を埋めている。

聖依子、米田の視線に気付き、米田の  
事を、じっと見つめて「助けて」、と、  
ゆっくりと口元を動かす。

米田、その場を動けず立ち尽くす。

聖依子、濡れた瞳で米田を見ている。

電柱に灯りに蛾が集まっている。

聖依子激しく綾瀬と絡み続けている。

米田、息をのみ聖依子を見ている。

酔っ払いが大声を出して走ってきた為、綾瀬が聖依子と場所を移動していく。綾瀬、小走りで、酔っ払いに文句を言っている横で、米田と聖依子すれ違う。一瞬、聖依子、米田の耳元で「此処で待っていて」と、小さく囁く。米田、振り返る聖依子を見ている。聖依子、青い石のネックレスを首からちぎり地面に落としていく。米田、聖依子達が居なくなると地面に落ちたネックレスを拾い握りしめる。綾瀬、一瞬振り返り、米田を見る。

○同・路地裏・行き止まり（夜）

激しい雨が降って来る。

金髪の聖依子（18）と、綾瀬幸太郎（58）が口論をしている。

聖依子、綾瀬に腕を捕まれるが振り払う。

綾瀬の口元が笑っている。

綾瀬、聖依子の背中に抱き付く。  
聖依子、壁に背中ごとぶつかる。  
綾瀬、衝撃で手を離し、うつ伏せに倒れる。

聖依子、足元にあった角材を握ると、  
綾瀬を角材で何度も殴っている。  
聖依子、倒れた綾瀬を見ている。  
綾瀬、血塗れになって倒れている。  
水たまりの地面が赤く染まって行く。  
聖依子、角材を投げて走り出していく。

○同・路地裏（夜）

米田、雨の中一人立っている。

○米田法律事務所内

直子、事務処理をしている。  
弓川、調べ物をしている。  
直子時計を見ると11時をさしている。  
直子心配そうな表情、弓川も首を振る。  
扉が開き、よれよれ姿の米田が入って

くる。

直子驚いた表情で、

直子「えっ、先生どうしたんですか？」

米田「ごめん、昨日徹夜で遅くなった」

弓川「家に帰らなかったんですか？」

米田「ちよっと気になる事があった」

米田、席に着き溜息をつく。

直子、米田にお茶を出す。

直子「まさか、無いとは思いますが、あのあ

と白井聖依子の所に行ったとか？」

米田、直子を見て無視をする。

直子「えっ、行ったんですか？」

弓川、米田を見ている。

× × ×

皆、黙々と事務作業をしている。

弓川、電話でやり取りをしている。

弓川「そうですか、近々に、そうですか」

弓川、受話器を置いて米田を見る。

弓川「先生」

米田「ん？」

弓川「裏情報ですが、聖依子に間もなく令状が出るそうです」

米田「あっ、そうか」

直子「先生、早く弁護を断ってください」

米田、直子を見る。

時計の時間17時をさしている。

米田、時計を見て立ち上がり、

米田「悪いけど今日はもう失礼するね」

米田、事務所から出ていく。

弓川、直子が顔を見合わせる。

弓川「先生何かに取り憑かれているよね？」

直子「あんな女に、どうしても惹かれるのか、

私にはもう理解できないです」

弓川「まあ、あの美貌では分からないでもな

いけど」

直子「それ言いますか？」

弓川「ああ、ごめん」

直子、不機嫌そうな表情。

弓川「でも昔、聖依子と先生の間に、俺達に分からない何かがあったんだろうな」

直子「奥さん子供がいるんだから、早く正気に戻ってほしいわ」

弓川「直子さんもいるしね」

直子、動揺して、

直子「な、何言っているんですか！」

弓川、無視して書類を見ている。

○米田家・リビング内（夜）

米田、智恵美、瑞穂と食卓でご飯を食べている。

瑞穂「パパ、今度のお休みいつ？一緒に遊園

地行こうよ！」

米田、上の空に話を聞いていない。

瑞穂、米田を見て寂しそうな表情。

智恵美「パパ、聞いている？」

米田「（はっとして）えっ、何？」

瑞穂「パパ、嫌い、もういい！」

米田「ごめん、ちよっとぼーっとしていた」

智恵美、瑞穂を見ながら、

智恵美「パパ、お仕事が大変なんだから、あ

んまり無理言わないの」

瑞穂、不機嫌にご飯を食べている。

米田、智恵美と瑞穂を見て、

米田「ごめん、仕事を思い出した、少し出て来る」

○郊外の山道（夜）

米田、車を加速して走り続けている。

カーブで対向車とぶつかりそうになる。

クラクションが鳴って、ハンドルを切り急ブレーキを踏む。

米田、車を脇に止め、シートを倒して目をつぶる。

○フラッシュ・米田の実家の全景（夕）

米田（30）、車から降りて、玄関の前に立っている。

○同・米田の実家・部屋の中

米田、手荒に机の引き出しを開けて、



探し物をしている。

慶子の声「正樹さん、帰って来るなら事前に電話くれたらいいのに、ご飯食べて行くでしよ？」

米田、机の中の奥の方から箱を見つけ、開けると、青い石が出て来る。

米田慶子（52）の階段を登る足音。

米田、青い石を握り引き出しを閉める。

米田歩き出し、部屋の扉を開けると、

慶子が立っている。

慶子「あっ、どうしたの？」

米田「ごめん、急いでいるからもう帰るわ」

慶子「えっ、ご飯食べていかないの？」

米田、階段を下りていく。

慶子、米田の後姿を見ている。

○同・公衆電話BOX内（夜）

米田がBOX内で電話をしている。

受話器から聖依子の声が漏れる。

聖依子の声「先生、早く私の所に」

○郊外の山道・車の中（夜）

米田、目をつぶっている。

「ドン！」フロントガラスに鴉が思い  
つ切りぶつかり、ボンネットに落ちる。  
米田シートから飛び起き、目を見開き、  
血の付いたフロントガラスを見る。

○米田家・玄関前・全景（夜）

米田、家の車庫に車を入れる。

○同・リビング（夜）

智恵美、寝間着でソファに座っている。  
車の音を聞き、ほっとした表情をする。  
玄関の扉が開く音、廊下を歩く音。  
書斎の扉が開き、扉が閉まる音。  
智恵美、リビングの扉を見てから、立  
ち上がり寝室に入って行く。

○同・書斎（夜）

机の上で、聖依子の資料を見ている。

米田、ポケットから青い石を出し、握りしめる。

○白井のマンション・外（夕）

周りにはひと気はない。

聖依子、辺りを気にしながらエントランスから出て来る。

直子、後ろから声をかける。

直子「白井聖依子さんですよ、すみませんが、少しお時間をいただけますか？」

聖依子、少し驚いた表情で、

聖依子「あんた誰？」

直子「失礼いたしました、私、米田弁護士事務所のアシスタントをしている渡辺直子と申します」

聖依子、直子の全身を見た後、公園のベンチを指して、

聖依子「私時間無いから、そこのベンチでも良い？」

○公園内

蝉が鳴き続けている。

聖依子と直子ベンチに座っている。

直子、話しづらそうに、

直子「時間が無いようなので、単刀直入に申し上げますね」

聖依子「ふっ、どうぞ」

直子「あなたは米田先生に本当に弁護をしてもらいたいんですか？」

聖依子「そうだけど、それが？」

直子「弁護の依頼は、先生に近づきたいための口実じゃないんですか？」

聖依子「言っている意味が分からないけど」

直子「あなたと会ってから、先生の様子が変わります、弁護の打ち合わせだけで先生があそこまで変わりますか？」

聖依子「それは米田先生に何か事情があるからでしょう？」

直子「私はあなたが有罪になろうと、無罪だろうとどっちでもいいんですけれど、これ以

上先生を惑わすのは、やめてほしいんです」

聖依子「あなた、只のアシスタントでしょう？」

直子「あなたのせいで、事務所の運営に影響が出ています」

聖依子「ふうん、私は邪魔だと、言う事ね」

聖依子、直子を見ている。

直子「あなたからの依頼がなければ、先生は」

聖依子「あんた先生と寝たの？」

直子、顔を赤らめて、

直子「なな、なにを言っているんですか、そんな事ある訳ないじゃないですか？あなたと違うんです、馬鹿にしないでください！」

聖依子「まあ、どっちでもいいけど」

直子「あなたと先生は人種が違います、あなたはすでに、超えてはいけない一線を超えています！」

聖依子、手と指を動かしながら、

聖依子「ふうん、何もわかっていないのね、で、その一線てなあに？何処かに見えるの？此処かしら」

直子「……」

目の前のベンチに笑みを浮かべたお爺さんが座っている。

聖依子「直子さんいいかしら？ 私は生きて行く為に仕方なく、口に出れないような仕打ちを受け入れて来たの」

直子、引き攣った表情で聖依子を見ている。

聖依子「直子さんに分からない世界かもしれないけど、力のない人は永遠にむしり取られ続けるの、だから、力のない私は、18年間、私の全てを奪われ続けたの、それが、ある日の出来事をきっかけに、奪われる側から、奪う側に変わる事ができたの」

西日が照り付け、蝉が鳴き続けている。

直子、気丈に聖依子を見て、

直子「だからって、何をしてもいいと言う訳じゃないと思います」

聖依子、直子に笑みを浮かべて、

聖依子「私は爺達を見ると虫唾が走るの、そ

れで、何故か、そいつらから、全ての物を奪いたくなるの」

聖依子、前の爺さんを睨む。

直子「それと先生は別ですよね」

聖依子「12年前、義父が死んで清々したと思っただけど、この先どうやって生きて行つて良いのか分からなくなって、当てもなく路地裏を彷徨っていたら」

直子、聖依子をじつと見ている。

聖依子「私の事を欲しいと、見ている人がいたの」

直子「それって、先生が、ですか？」

聖依子、直子の話を無視して、

聖依子「あなたには分からないと思うけど、一瞬で全てが救われる瞬間ってあるのよ、あの時の私がそう」

直子「でも、そんな先生をあなたは不幸にしようとしている」

聖依子、直子を見て笑っている。

聖依子「あなたは、先生が欲しいだけなんで

しょう？　でも、自分にはできないからって私に八つ当たりをしているだけなのよ」

直子、立ち上がり、

直子「な、なにを言っているんですか？　私は先生の事を心配して、あなたに話しているんじゃないですか？」

老人、よぼよぼと立ち上がり、歩こうとするが、転んでしまう。

聖依子「くだらない、時間の無駄だから、もう行くわね」

聖依子、立ち上がり歩き始め、老人に優しく手を差しだして、

聖依子「大丈夫ですか？　危ないから気を付けてくださいね」

老人、嬉しそうにベンチに座る。

聖依子、一瞬直子見て、歩いて行く。

直子、呆然と見送る。

○白井のマンション・外（夜）

米田、マンションを見上げている。



○同・リビング内（夜）

米田、聖依子ソファに座っている。

聖依子、米田を見ながら、

聖依子「もう来ないんじゃないの？」

米田俯いて座っている。

聖依子、耳元で囁く。

聖依子「私みたいな種類の人間は此処にはいられないの、先生も分かっているんでしょ」

米田「本当に何もしていないなら僕が無罪を証明してみせます」

聖依子「証明なんて必要のないのよ、してもまた同じ事が起こるのよ」

米田「どうして同じ事を繰り返すんですか？何も得るものは無いですよね？」

聖依子「何も欲しくないけど、繰り返すしかないのよ、これは私の中の何かが終わるまでは、永遠に続くの、仕方がない事なの」

米田「意味が分からない」

聖依子、米田の耳元にささやく。

聖依子「そう言う事ってあるのよ、先生、何

でも分かつとうとしないで、綺麗なものと汚いもの、それぞれに進む方向が違うの」

米田、聖依子を抱きしめようとする。

聖依子、体をさっとよける。

米田「えっ」

聖依子、笑みを浮かべて、

聖依子「先生とはまだ、此処で、じゃない」

米田、聖依子を見ている。

聖依子「先生はまだ迷っている、まだここに

未練がある、でしょ」

米田「でも此処にいる」

聖依子「此処にいるけど、まだ此処に居ない」

米田「僕にどうして欲しいのですか？」

聖依子「私を此処から連れ出してきて、先

生の持っている全てを無くしてくれたら、

私の全てを上げる」

米田「……」

窓の外、半月が出て雲に隠れて行く。

○バー・「魔女の祝福」(夜)

米田を挟んで弓川、直子、カウンターに座っている。

綾瀬がロックグラスを3つ置く。

米田、無精髭、寝不足の様子で、グラスの酒を一気に飲み干す。

弓川「先生、大丈夫ですか？」

米田「大丈夫だよ」

直子「その顔は、大丈夫じゃないでしょ、奥様も心配していましたよ」

米田「かみさんに何か言われたのか？」

直子「それもありますけど、あの聖依子に、深入りしすぎじゃないですか？」

米田「すまん、あと少しだから、だから、もう少し待っていてくれ」

弓川「先生、一体どうしちゃったんですか？」

米田の前に、追加のお酒が出てくる。

米田「心配してくれてありがとう、明日も打ち合わせがあるからいくよ」

直子「ちょっと待ってくださいよ」

米田、席を立ちあがりながら、

米田「ごめんな、休みなのに」

弓川「先生、いいからもう少し話しましょう」

弓川、米田を強引に席に着かせる。

弓川「先生いいですか、何でそんなに、執着しているんですか」

米田「別に、執着なんかしていないよ、弁護士として、対応しているつもりだけど」

直子「そうは、見えませんが」

米田「……」

弓川「先生、家族もいるんですよ、先生が聖依子の毒に侵されてどうするんですか？」

直子「目を覚ましてくださいよ」

米田「君達には、分からない事もあるんだよ」

直子「なんですか、それは」

弓川「心配しているんですよ」

直子「そうですよ、この案件を担当してからの先生は何か怖いです」

米田「怖いかな」

直子「先生何か良くない事、考えていませんか、もうこの案件から降りましょうよ」

米田、グラスの酒を一気に飲み干し、立ち上がる。

米田「ありがとうな」

弓川「先生」

米田、そそくさと店を出て行く。

弓川、直子困った表情で、扉を見て、顔を見合わせる。

○住宅街（夜）

米田、月明りの夜道を一人歩いている。夜空に満月が輝いている。

米田、満月を見上げて笑みを浮かべる。

○白井のマンション前・全景（夜）

聖依子、エントランスから出て辺りを見渡し、誰も居ない事を確認する。

道路向こう側の路肩に米田の車が止まっている。

車の中の運転席に米田が座っている。聖依子、車の横に行くとロックが解除

されドアを開ける。

聖依子、米田を見て、笑みを浮かべる。  
助手席に乗り込んで、ドアを閉める。

米田と聖依子見つめ合う。

聖依子、米田に抱きつく。

米田、聖依子の体を助手席に戻す。

米田「ちよっと、まって、急がないといけな  
いから、今はいくよ、いいね？」

聖依子「ふふっ、それは私のセリフよ、先生、  
本当にいいの、今なら間に合うかもよ」

米田、聖依子と目を合わせ、前を向く。

米田「もう決めた事だから」

米田、車のエンジンをかけて発車する。

### ○高速道路（夜）

米田の車、加速して走っている。

聖依子の声「先生、どこに行くの？」

ヘッドライト、対向車すれ違っていく。

### ○田舎道の脇道・全景（夜）

曇天の空、今にも雨が降りそうな様子。  
米田の車、道の路肩に止まっている。  
車、上下にカタカタと揺れている。

○車の中（夜）

聖依子、米田の上にまたがり、貪る様に唇を吸いあっている。  
激しく、激しく求め続けている二人。  
米田、聖依子の目をじっと見つめる。  
フロントガラスに強い大粒の雨が降りつけてくる。  
轟音と共に、雷光が落ちる。  
二人動きを止めて、窓の外を見つめる。  
フロントガラスに、凄い勢いの雨が降りつける。  
直ぐに二人、再び激しく絡み続ける。  
米田、聖依子の唇を吸いながら、窓の外  
の雨を見ている。

○田舎道の脇道・全景（夜）

上下に揺れている車に、凄い豪雨が、  
吹き付けている。

○米田家・リビング（夜）

智恵美、窓の外の豪雨を見ている。

○米田法律事務所（夜）

直子は事務処理、弓川電話をしている。  
各々、窓の外の豪雨を見ている。

○白井のマンション・全景（夜）

豪雨の中、パトカーが2台止まってい  
て、パトランプが点滅している。

警官が白井のマンションを見上げる。

無線の声「逮捕状が出ましたので、これより

白井聖依子のマンションに向かいます」

豪雨、アスファルトに降りつけている。

パトランプ点滅している。

○トンネルの中（夜）



米田の車、暗く長いトンネルの中を走っている。

対向車は無く、米田の車が走っている。

○車の中（夜）

フロントガラスの先は、ヘッドライトの灯りのみで、その先は暗闇しかない。

聖依子「先生、後悔していない？」

米田、運転しながら一瞬聖依子を見る。

聖依子「ねえ、先生ったら！」

米田「そんなこと今更考えても仕方がないよ」

聖依子「あははっ、怒っているの？」

米田「怒ってないよ」

聖依子「先生、これからどこに行くの？」

米田「行き先は、北の果てと決めているんだ」

聖依子「へえ、どうして北なの？」

米田「前から行きたかったんだ」

聖依子「そうなんだ」

米田「どこに行っても、いつかは行き止まるし、なら自分の故郷がある先まで行ってみ

たかったんだ」

聖依子「いいわね、北の果てに行くんだね、

実は私も行って見たかったわ！」

フロントガラスの先は闇しか見えない。

×

×

×

暗闇の中、車のエンジンの音のみ。

聖依子「このトンネルいつまで続くの？」

米田「もう間もなく終わる筈だけど」

米田、アクセル加速させていく。

エンジン音が激しく鳴り響く。

聖依子、米田の横顔を見る。

ヘッドライトの先は暗闇が続いている。

米田「大丈夫？」

聖依子「私はずっと暗闇の中にいたから」

米田「そうだったね」

聖依子「でも、もう先生がいれば大丈夫」

米田「いつかそれも終るから」

聖依子、トンネルの先を見ている。

米田、聖依子を見て、

聖依子も米田を見る。

米田「それまで、一緒だから」

聖依子、笑みを浮かべる。

聖依子「先生、私達やっところまできたね」

車がさらに加速していく。

トンネルの先、微かに光が見えて来る。

車が更に加速していく。

米田「見える？」

聖依子「先生、闇の先の光、って、こんなに

綺麗なんだね」

車がさらに加速していく。

トンネルの先、光が近づいて来る。

米田「やっ、だね」

米田、聖依子が光に包まれる。

米田、聖依子の笑い声が響く。

○車の中（明朝）

車窓から海が一面広がっている。

聖依子、突然後ろの席の鞆からビデオ

カメラを取り出して撮影は始める。

聖依子、笑みを浮かべ窓から海の景色

や米田を撮影している。

米田、気が付き笑みを浮かべ戸惑う。

米田「やめろよ、恥ずかしいよ」

聖依子「良いじゃない、私今まで記憶にとどめておきたい事なんてなかったんだから」

米田、照れながら聖依子を見ている。

聖依子「あっ、先生危ない！」

米田「えっ」

米田慌ててハンドルを切って、対向車を避ける。

対向車、クラクションを鳴らす。

米田の車、減速して走っている。

米田「危なかったな」

聖依子、カメラを回しながら、

聖依子「こんなところで、心中は嫌よ」

米田「ごめん、でもカメラをいきなり回すからだろ」

聖依子、カメラを持って後ろの席に移動する。

聖依子「この海岸線、凄く綺麗、先生もつと

スピード出して」

米田、車をゆるやかに加速させていく。  
なだらかなカーブのある海岸線をつ  
て行く。

聖依子、窓を開けてビデオを回して海  
岸線を撮っている。

○ドライブイン・駐車場

米田と聖依子、車から降りて店の中  
入って行く。

聖依子、米田の事を撮り続けている。

○同・レストラン内

米田と聖依子楽しそうに食事をしてい  
る。

食事の合間にも聖依子、米田を撮って  
いる。

米田、カメラを意識して楽しそうに食  
べている。

○A 県・温泉街

温泉街、湯けむりが出ている。

米田、聖依子、浴衣姿で腕を組んで石段を下りている。

二人、店前で温泉まんじゅうを買って食べている。

○小川の岸

浅瀬を縁取る草の生い茂った岸。

川に照り付ける太陽。

米田と聖依子川岸で水遊びをしている。

聖依子美味そうに川の水を飲んでいる。

聖依子「先生、お水が美味しい！」

聖依子、米田に笑いかける。

○街道（夕）

道路の周りは平原が広がっている。

対向車もなく果てしなく続く一本道。

車は米田の車だけ進んでいく。

前方に黒い雨雲が見えて来る。

○米田の車の中

米田、聖依子、フロントガラス越しに空を見上げる。

聖依子、不安げな表情。

フロントガラスに雨の粒が落ちて来る。

直ぐに大粒の雨が降り始める。

スコールのような強い雨。

あまりの強さに前が見えなくなり、米田が車を止める。

車の中、雨の激しい音、窓の外は雨で周りの景色が見えない状況。

米田、聖依子顔を見合わせる。

○街道・一本道の脇（夕）

止まった米田の車に、強い雨が降りつけている。

車の左右のドアがあく。

強い雨の中、米田と聖依子が笑いながら出て来る。

強い雨を浴びながら二人笑っている。

踊り始める聖依子と米田。

そのまま、二人服を脱ぎ始める。一枚、一枚服を脱ぎながら下着姿になる。

雨はさらに強くなるが、二人激しく踊り続けている。

誰も居ない一本道、雨降り続けている。雨の音と、二人の雄叫びが道に響いている。

○最北端の岬・駐車場（明朝）

高台、目の前に海が見える駐車場に米田の車が1台だけ止まっている。

空が群青色に染まっている。

○車の中（明朝）

米田と聖依子、水平線の先を見ている。

米田「此処まで来られたね」

聖依子「うん、本当に来られたね、此処まで」

徐々に朝日が出て来る。

米田「綺麗だね」



聖依子「私にもこんな朝が来るんだね」

米田「よかった、一緒に見られて」

聖依子「でも」

米田「でも？」

聖依子「私は夜明け前の群青色の空が好きだ

な、その方が私にはしっくりくる」

米田「しっくりって？」

聖依子「群青色って一瞬だから」

米田「でも、生きるってずっとって事だよ」

日が昇り、太陽の日差しが、二人にかかりはじめる。

米田と聖依子、眩しそうに海を見ている。

米田、エンジンをかける。

聖依子、そのしぐさを見ている。

米田「そろそろ行こうか」

聖依子「そうだね」

米田「これから、どこ、」

米田の言葉を遮り、

聖依子「あとはゆっくり、行ける処まで」

米田「そうだね、少し急いできたからね」

米田 アクセルを踏んで車が走り始める。

### ○国道のトンネル入口

米田の車、なだらかな坂の道を下って行く。

米田の車、ゆっくり走りながら、トンネルの中に入って行く。

米田の車が入ってから、トンネルを通過する車は通っていない。

### ○拘置所・入口・全景

T・1年後

強い雨が降り続けている。

傘を差した直子と弓川が拘置所を見上げた後、拘置所の門の中に入って行く。

地面が水浸しになっている。

雨水が緩い坂の下の方に流れていく。

側道の水が激しく流れている。

○溝川・全景

河川に泥水が激しく流れ込んでいる。

○同・接見室内

弓川弁護士、直子が席に座っている。

米田、刑務官と歩いて来る。

生気の無い米田が、ゆっくり席に着く。

弓川と直子が、アクリル板越しに、米

田と対峙する。

直子、悲しそうに米田をみている。

弓川「先生」

返事をしない米田。

弓川「先生、どうしても、こんな事に」

米田、自分の手の平をじっと見ている。

○フラッシュ・北の街・マンション部屋の中

古いマンションのベッドで、聖依子と

貪る様に、絡み合っている米田。

×

×

×

ぐったり寝ている二人、聖依子が目を

覚まし、まどろんだ表情で米田に絡み  
ついでいく。

× × ×

マンションの部屋の中に、空き缶、コ  
ンビニ弁当の残骸を見ながら、呆然と  
している米田。

その後ろのベッドで寝ている聖依子。

× × ×

聖依子ベッドの中で、米田の体を嘗め  
回している、米田、天井を見ている。

× × ×

聖依子、米田の顔を見て笑っている。

米田、呆然と外を見ている。

× × ×

ベッドの中で寝ている聖依子。

米田放心状態で、聖依子を見下ろす。

米田、聖依子の首に手を当て、ゆっく  
り首を絞める。

聖依子両目を開けて笑顔で米田を見る。

米田、徐々にきつく首を絞めていく。

○拘置所・接見室内

弓川「先生、何か言ってください！」

直子「先生、先生、お願いです、答えてください！」

米田、手の平をじっと見つめている。

○フラッシュ・北の街・マンション部屋の中

米田、聖依子と目が合い首を絞める手を一瞬止める。

聖依子、米田の顔をじっと見ながら、

聖依子「先生、もう一回だけ言わせて、あの時義父を亡くして、路地裏を彷徨っている時に、私を求めている先生を感じて、私は本当に救われたの」

米田、表情を曇らせ、手を止めている。

聖依子「先生、私はあの時から既に死んでいたのよ。だからためらう必要ないの。いいのよ、先生」

米田、首を絞めている手が震えている。

米田「ごめんね、僕には」

聖依子目を見開き、米田を見て果てる。  
米田、聖依子を見て、震えている。

米田「これで、いいんだよね？」

○同・マンション外・全景

マンションの前に、警察の車が数台止まっている。

住民が警官に説明をしている。

警官、数名がマンションの扉の前まで移動していく。

警官達、管理人と確認をして部屋の鍵を開ける。

○同・部屋の中

警官達と管理人、ドアを開けると鼻をつまんで、むせかえる。

ゴミだらけの部屋、白髪頭、無精髭で、汚れた服の米田が玄関の方向を見る。

ベッドの上では、蛆が沸いている聖依子の死体が横たわっている。

窓には、蛾が張り付いている。

○拘置所・接見室内

米田 天を仰ぎ、涙目で笑う。

直子、米田を見ている。

弓川 「先生？」

米田、目から涙を流している。

米田 「どうして、ここに、帰って来たんだ」

手の平に涙が落ちる。

直子 「先生、どうしてこんな事に」

弓川 「先生、聞いていますか？」

米田、弓川、直子を見ながら、

米田 「大丈夫だよ、聞こえているよ」

直子と弓川顔を見合わせる。

米田、諦めた表情する。

弓川、悲し気に首を振る。

直子、涙を流している。

米田、二人に微笑み返す。

弓川、直子、頷いて米田を見る。

画面、暗転。

○モニター画像

「カチッ」と、スイッチが入る。

波打つ画面、砂嵐がしばらく続く。

画像の乱れが徐々に直り始める。

映像が、真っ白になる。

聖依子が突然画面に現れる。

聖依子画面の位置を確認している。

聖依子、髪を整える。

神妙な顔つきで画面を見ている。

聖依子「米田正樹さん、この映像がどのような形で先生に届くか分かりませんが、もしくは届かないかもしれません、私の最後の想いをどうしても聞いて貰いたいので、こんな形で記録に残させてもらいます。先生が見てもらえることを信じて話しますね」

聖依子、深呼吸をして話し始める。

聖依子「先生に直接言えればいいのだけれど、そんな勇氣はないから今から話します。先生の人生をめちゃくちやにしてしまっごめんなさい。そしてこんな私に付き合っ



くれて本当に感謝しています。この事は絶対  
に言っておきたかった、先生と過ごした  
この短い期間、本当に楽しかった。生きて  
いる事がこんなに楽しいなんて今まで思っ  
た事もなかったから。私が生きてきた30  
年間に毎日泥水を呑むような日々だったか  
ら。生きる為に仕方がなかったとはいえあ  
まりに汚され続けたから。でもこんな夢の  
ような日々がずっと続く筈ないよね。こん  
なに素晴らしい思いをさせて貰えたけど、  
泥にまみれている私の心と体は決して元に  
戻る事はありません。私も最初はもしかし  
たら、先生といたら昔の自分とサヨナラが  
出来るかと勘違いをした時もあったけど、  
やはりそれは無理な事でした。汚れた水は  
どんなにきれいな水を足しても決して綺麗  
な水にはならない。そしてどんなに抗って  
も流れる汚水は下に、下に、流れて沈殿し  
ていきます。その事はもうどうしようもあ  
りません、だから私みたいな水の底に沈殿

している汚物のような人間は、きっと生きていてはいけません。私は私が憎んでいる。醜悪で、愚かで、稚拙で、脆く、自己愛が強い、爺達と一緒に存在です。だから私は私の存在を無くしてしまいたい。先生にこの私自身に止めを刺してほしい。先生に私を殺めて欲しいのです。本当に身勝手に厚かましいお願いなのはわかっていきます。私は18歳の頃から私の人生をいつ終わらせるかをずっと考え、今まで生きながらえてきました。でもこのままで死んでしまうのはあまりに自分がみじめすぎると考え、踏み切れずにいました。でも短い期間でしたが、先生と過ごした素晴らしい日々の思い出ができて、私にある夢とある希望、そして過去は決して変える事が出来ないという絶望を与えてもらえました。これからずっと先生と普通の日常を過ごせたらどれだけ幸せか、その事を考えると気が狂いそうになりました。でも先生と過ごし

たかりそめの日常は、本当の日常に変わり  
そうな段階で、全てが壊れてしまう儂い夢  
の中の出来事だって事はわかっていたんで  
す。そして今先生と過ごしている夢のよう  
な時間は、その後ろにいつも絶望の足音が  
迫って来ていて、その夢のような時間をす  
ぐに飲み込んで行くのです。だから先生、  
最後の我儘だと思って許してください。先  
生と『北の果ての川で飲んだ水』、本当に  
美味しかったな、あの時思ったの、12年  
前、せめてあの路地裏で先生と出会うこと  
が出来て居れば少しは私の人生もましだっ  
たかもしれないと考えると、思い出すたび  
に悲しくて気が狂いそうになりますけど、  
仕方がないことなんです。  
全ては導かれた流れの中に、含まれて行く  
のですから」

聖依子、笑みを浮かべる。

聖依子「わたしがいうのもおかしいけど、せ  
んせいに、もういちどしあわせが、おとず

れることを、ほんとうに、おいのりしてお  
ります、せんせい、そしてさいごに、わた  
しをせんせいの、うでのなかで、死なせて  
くださいね、こんな、わたしといっしょに  
いてくれて、ほんとうに、ありがとう」

聖依子、じっと画面を見ている。

聖依子、笑みを浮かべ、ビデオのスイ  
ッチを切る。

プチッと音がして画像が砂嵐になる。

《終り》

